

凡例

一 岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫に収められている「御評定書」二冊（総目録番号E3-1・2）「御留帳評定書」一二冊（E3-3、14）のうち『池田家文庫資料叢書3・御留帳評定書』上・下（岡山大学出版会）として刊行されたものに続き、残りの四冊（E3-11、14）を翻刻する。あわせて寛文六年の「大寄合之覚書」（E3-22）を付録として収めた。

一 解説は『御留帳評定書』上のものを参照されたい。

一 翻刻にあたっては、できるかぎり原本の体裁を再現するように努めたが、紙面の都合上、または読みやすさを考えて、変更を加えたところもある。改行はいちいち指摘せず、闕字・平出は一字あけで示した。

一 表紙は、およその形状を罫線枠で囲んで示した。朱書された貼紙の内容は、「」を付けて記し、右肩に（貼紙朱書）と注記した。

一 付紙は、およその場所に※印を付け、その付近に内容を「」を付けて示し、（付紙）と注記した。

一 史料本文の字体は原則として常用漢字を用い、異体字・略字・俗字・あて字については一部を使用し、必要に応じて通用の文字を右行間に（ ）で示した。地名などの表記が通用のものとは異なる場合、適宜現行の文字を同様に（ ）で示した。

一 史料を読みやすくするために、適宜、読点（ ）、並列点（・）を付けた。

一 明らかに誤字・誤記と思われるものは、右行間に正しいものを（ ）で示し、疑念が残る場合は（カ）とした。脱字と思われるものは（脱）（脱力）、重複していると思われるものは（衍）（衍力）とした。意味不明の場合は（ママ）、記載がなく空白となっているところは（アキ）とした。

一 変体かなは平かなに改めたが、格助詞のうち次の文字と、接続詞の「并」は活字を小さくして使用した。

一 くりかえし記号は、「ㄣ」（漢字）、「ㄣ」（ひらかな）、「カ」（カタカナ）、「く」（二字以上の熟語）を用いた。

一 旧字・古字のうち、次のものは新字体に改めずにそのまま使用した。

龍	籠	籠	嶋	寫	餘	飴	冝	富	舛	燈
珎（珍）	躰（体）	倅（倅・倅）	躰（倅）	噉（扱）	并（并）	邠（州）	吳（異）			
早（畢）	粮（糧）	扣（控）	帑（紙）	欵（歛）	取（最）	窄（牢）	哥（歌）			
沉（沈）	礮（礮）	迎（とて）	斛（石）	脉（脈）	毗（嘩）	桧（檜）	俛（儘）			

地(蛇) 菌(園) 鴈(雁) 鬧(鬧) ヌ(しめ) オ(等) ㍻(より)

一江戸時代には制度的・慣習的な身分や格式が存在しており、現代からみれば差別的な事実や言動、用語などが一般に通用していた。そのため史料のなかには、そうした表現や事実が記載されていることもあるが、正しい歴史認識を形成するためには、史料に基づいて歴史的な事実を明らかにする必要があるとの立場から、そのまま掲載した。ただし、固有名詞との関連で現在の差別を助長しかねない場合は記載を差し控え、「□」で示したところがある。

一本叢書の企画・編集は、岡山大学貴重資料刊行推進会(平成29年度、岡山大学附属図書館長今津勝紀、同副館長李禎之、岡山大学社会文化科学研究科教授山本秀樹、同准教授徳永誓子、教育学研究科准教授村井良介、岡山大学特命教授(研究)倉地克直、附属図書館学術情報サービス課長森谷めぐみ)が行った。

一翻刻原稿の作成は青木充子と倉地克直が行った。原本との照合・割付・校正および全体の監修は倉地が行った。版組は今津勝紀が行った。

付録 大寄合之覚書 寛文六年

(表紙)

寛文六年八月十六日ヨリ同廿八日迄

大寄合之覚書

(貼紙朱書)

「一」留一番ノ内八」

八月十五日

一來月十七日 東照宮御祭礼之御供、土肥飛驒・若原監物・岸織部・

八木平兵衛ヲ被 仰付

同日

一出仕之御札相濟候以後、小書院江 御出被成、老中・番頭・諸

頭・諸役人・組頭江 御直ニ被 仰渡候ハ、御仕置之義末々迄直

ニ被成度 思召候ニ付、何ニ不寄存寄之儀書上ケ候様ニと侍中江

被 仰聞候処ニ、存寄之儀共品々書上ケ候、御為を存故と御満足

ニ被 思召候、右之書上ケ明日ハ評定所江御出シ被成、僉議可被

仰付候間、何茂替りくニ罷出、存寄無遠慮僉議可仕候、僉議ニ

落候義ハ可被 仰付之由

一評定所江罷出者替り様之儀

毎日罷出ル者

池田伊賀

日置猪右衛門

安藤左

伊木頼母

田中九兵衛 山内権左衛門 泉八右衛門 鈴田武兵衛

森半右衛門 津田重二郎 中村主馬 神岡書

中村久兵衛 藤岡八郎兵衛 石川善右衛門 都志源右衛門

西村源五郎 河村平太兵衛 岡田喜左衛門 片山勘左衛門

替り候て可罷出者

御番頭之内方式人宛、御礼如次第之ニ可罷出候

御兎小性頭老人宛 御小姓弓之頭老人宛

御城代老人宛 御鉄炮頭之内方式人宛

御奏者老人宛 御歩行頭式人宛

御小性之組頭老人宛 御馬廻り之組頭式人宛

予刃様御横目老人宛

右之通替りく罷出シ加藤甚右衛門毎日罷出可令読之

八月廿六日評定出座之面々、但シ右ニ記日ニ罷出ル者ハ此

書付ニ除之

土肥飛驒 瀧川縫殿 稻四郎右衛門(兼腕カ) 柴田市左衛門

土倉登之介 古田斎 渡部友之介 村井弥七郎

稲川七右衛門 安藤左 竹越八郎兵衛 喜多嶋忠右衛門

薄田藤十郎 梶浦勘介 山田弥太郎

以上十五人、外二日々相定り罷出ル式拾人

都合三拾五人烈座、辰之尅ニ揃

一 日置猪右衛門被申候ハ、昨日も申通、何茂存寄候儀ハ縦其身役義

不当事ニ而も無遠慮申出シ、僉議可然候、昨日 御意被成候ハ、

僉議之場にてハ存寄ヲ不申、わさくにてハか様に存寄候へとも

我才共申義にて無之など、申様なる義若於有之ハ、僉議被 仰付

専も無之事之由

一士民町人迄之書上ヲ 御自筆ニ而御書集メ御出シ被成、加藤甚右衛門読候ヲ承、如斯書付申候条相違之儀又落候事共可有御座候事

初ケ条

一郡々林ハ持かゝり野山之分ハ割符ニ被 仰付、田嶋之養野山ハ仕候様ニ可然との事

一今一ケ条右同事之趣意

右二ケ条少僉議有之候得共、在之儀何レも不案内之事、此寄合之内ニ惣郡奉行共呼ニ遣シ、御郡奉行共一同ニ罷出、僉議ヲいたさせ、其上ニて落着可然之由、伊賀・猪右衛門被申、加様之類ニハ付紙ヲ仕、奥ヲ読、藤岡八郎兵衛申候ハ、獵場ハ入相ニ成候ても可然候、肴多ク成申儀可有之候、野山入相之儀心得かたく候由

一在之ニ而まつしきものなと相果候へハ、筵こも二包、手足ハ外へ出候て有之候、棺ヲ拵入レ候様ニ可有之事ニ候半哉、諸事五人組ヲ定、善事之ほうひ悪事之罪科五人組江かゝり候様ニ可有之儀かとの事

棺之事一段尤之由、泉八右衛門申候ハ、片上六郎左衛門何れもへ申合、家一軒方一ケ月ニ錢三文宛出し、板ノ厚きと薄きニて棺ヲ拵置、まつしき者ニハ遣シ、身をも持候者ニハ代ニて売せ候由申候へハ、一段尤之儀と何も申候、河村平太兵衛・西村源五郎申候ハ、棺之事此頃申付候得共、弥六郎左衛門申付ル通ニ何も江申触候様ニ可仕由

一善事之褒美悪事之罪科共、五人組へ懸り候様ニ可然儀ニ候ハん哉と申もの多ク候、是も重而御郡奉行共罷出ル節僉議可有之由
一郡々江講釈仕者入置申度由之事

一段尤ニ候、急ニハ不成事ニ候間、連々下ニて聞立、入候て可然候、其内似合敷者も候ハ、公儀ヨリ御入レ成儀も可在之由、伊賀・猪右衛門被申候

一御家中着類之御法弥強ク被 仰付、一才ニ木綿ヲ着シ候様ニ仕度との事

色々僉議有之、森半右衛門申候ハ、御法いかにも能立申候かと存候、背候者見申事も無之様ニ存候、其上上乃下迄一才ニ木綿方外着シ申間敷と有之候へハ、老中も人夫も同事之衣類ニ候、又老中乃下番頭乃下或ハ物頭より下と段ヲ御立可被成儀候も如何ニ候、又いつヲ限とも無之事ニ先ハ木綿方外ヲ着シ不申候と在之段も餘成事候、唯今迄之通ニて可然御座候ハん哉と申候、津田重二郎申候ハ、一才ニ木綿ニ被仰付候ハ、可然候、木綿着申事無用との儀ハ無之候へ共、只今迄之通ニてハ小身なる者之子共迄木綿を着申事ヲはいやかり候へハ、親々迷惑仕ものとも多ク有之由承候、何と仕候ても衣装のおこりも若キ者ハ止不申候と相見へ申候由申候、猪右衛門被申候ハ、先一等ニ老中ヲ初木綿を可着由被 仰出、其以後何乃上ハ田舎絹、何乃上ハ袖迄御赦免など、有之候て可然かと被申候、森半右衛門申候ハ、衣類之儀ハ人々ニ相当ル事ニ候、右ハ今日之御僉議ニ不限、今度之寄合之度々ニ被仰聞、存寄をも御聞可被成かと申候、尤之由にて僉議之落着無之候事

一平免之事去年之ことく余免ハ京銀之利分乃やすく御借シ被成候様ニと之義
色々僉議在之、如去年余免ハ用銀之為に被仰付事ニ候へハ、御借シ可被成義にてハ無之候、三ツ八分乃上ハ用銀ニ上ケ置

可然候はん哉と申者共御座候

一 御国平免之事かゝり物之分ハ御家中へも御懸ケ被成、平免ハ有次第二可被下と書上ケ候儀、伊賀被申候ハ、此段書上ケ候者悪敷心得候と見ニ申候、此義ニ不限 殿様之御心ニ下之痛ニ成候ても御蔵ニ御米之納り候様ニと 思召儀ハ毛頭無之候、我才を初平免ハ御蔵給所何れも同事と存居申候由被申候、森半右衛門申候ハ、平ハ一才之平ニて候、代官郡奉行ニ被下物、其外種橋諸事之引ケ方中積りニ仕引申候故、此段ニ不審を立候と相見へ候、其上平ニて無之以前ハ口米ヲ被下候、平ニ成口米ヲ不被下候へハ、諸事引ケ方ニ左様ニ過分ニ入申儀ハ有之間敷候など、疑ひ之心ヲケ様ニ書上ケ申物と見へ申候、此段ハ御家中にて左様ニ申者も御座候由、内ニ承申候、以来ハかゝり物之分御家中江御懸ケ被成候品々具ニ御切手ニ書のせ、口米をも被下候様ニ御座候ハ、申分ハ在之間敷かと申候

一 御城詰仕候者又ハ御用人などに前々のごとく御足米可被下儀かと之事

色々僉議有之、御足米ハ知行高ニ被下ル事ニ候へハ、おなし御用人ニても各別高下御座候、御足米ヲ一才ニ被 召上 御役領ニ被成可被下儀と之僉儀多ク候事

一 御家中鶉殊外はやり一分式分声能をハ壹両貳両ニも買申候、無專費ニ而候由

うつら之義買候事御法度と可被仰付義ニても無之、餘はやり申さたも無之候へハ、先々其分ニ被成置可然候はん哉、御僉議之沙汰可有之候間、自然ニ止可申候由

一 狩り出シ人之義年々奉行ヲ被仰付御改可被成儀ニ候、新知役替品

々有之事ニ候へハ、一年とも元のごとくにハ無之候、年々奉行被仰付御改無之ハ、すハリ申間敷との事、此段尤ニ候由

一 寺ヲ山之ふもとへ被遣候様ニ可被仰付義かと之事

猪右衛門被申候ハ、此段兼々左様ニ存事ニ候へとも、過分ニ御そうさも参事ニて候へハ、急ニハ不成事ニ候、連々以テ左様仕度事之由

一 逼塞人之事借銀相濟其假罷出新屋敷ヲ被下作事仕候へハ、又借銀出来元ノ者ニ成申候、在郷ニて之家をハ自分ニ仕候て成共、岡山之家をハ其まゝ被下候様ニ可有之事ニ候はん哉との事

色々僉議有之、爰許之家ヲ被下置候共、在郷ニ居中内修理仕事成間敷候、在郷仕候程之者ハ前廉ヲ手前不成候故打捨置候家ヲ、亦五、七年も修理不仕候ハ、在郷ニ罷出候節ハ家もこぼれ作事不仕候ハ、居申候事も罷成間敷候、左候ハ、是程御事かきの家屋敷ヲ御明ケ置被成候ても無專事ニ候、逼塞明キ候共番頭吟味之上ニ而定り之年方内ニ借銀相濟候者ヲハ一年も二年も御理り申、逼塞ヲ延被遣、作事才をも仕ル心当テも在之候時分、罷出候様ニ被仰付候ハ、重而借銀も出来中間敷候哉と申候

八月十七日之評定

一 鈴田武兵衛・津田重二郎・森半右衛門三人相談にて申候ハ、御歩行之者江戸御供ニ被召連候刻、道中岩乗仕候者、又江戸中御番御供使才無懈怠相勤候者、其品々に随ひ例年御褒美被下来候、此義自今以後御止被成可然奉存候、御褒美にかゝハリ道中岩乗江戸にて無懈怠相勤候ニ而ハ中々御座有間敷候へとも、何と哉覧心能

無之所御座候、道中ニ而御用申付、跡へ十町共戻り候へハ、巷里

ノ余も走り不申候へハ、追付候事も不罷成、馬にも乗り候へハはや岩乘ニ立不申候、御歩行江之御褒美ニハ餘り少分之義ニても無之候得ハ、左様之御用申付ルニハ此方ニも用捨之きミも御座候、悪敷習ニ成申事も可有御座候、旁以右相定ル御褒美ハ御止被成、道中ニ而不岩乗仕、江戸ニ而相煩御奉公欠シ申候共、真実ニ御奉公仕者、其外其品ニ隨ひ御褒美ヲも被下、又ハ御取立被成様ニも御座候ハ、御奉公之はけミニも成可申候、御歩行之者ハ岩乗仕者共多ク御座候ニ付、勝手之為ニハ迷惑ニも存ル者も可有御座候得共、存寄之通申上候、但当年之儀ハ御褒美被下候節之者ハ心當テニ仕者も可有之事ニ候間、先当年ハ例年之ことく被遣、以来被遣間敷との義申渡可然存候、又御徒横目共ハ道中江戸中も殊之外骨折申儀ニ御座候、其上道中ニ而茂江戸ニ而も御横目ハ大勢相宿ニ居申事も成不申候得ハ、勝手之為ニも悪敷事多ク御座候間、路銀馬銀御増シ被成被仰付候様ニ仕度候由

伊賀・猪右衛門一段尤之由

一 御毛見之事功者ヲ式拾人程御撰ミ被成被仰付候様ニとの義、重而御郡奉行何茂出候節僉義可有之由

一 救米之事

右同断

一 兩年取実無之、当年ハ大事之年ニ而候

一 一兩年取実無之候、民之豊成ハ侍之本ニ而候、是ヲにくミそしるハ侍ニ而候、悪敷風俗女之しつとの心ニ而候との事

右同断

一 在々御普請所日用米百石程被遣御置、田地之繕ニ被仰付候様ニと

の事

石川善右衛門申候ハ、此日用米ニ而埋土ヲ仕、麦田ニ可成所ニ麦田ニ仕候ハ、救米之道理ニ而候、殊ニ永代之儀ニ候、ケ様ニ仕度事ニ候、何茂尤之由申候、是も重而御郡奉行共一同ニ全義^⑧可在之由

一 殿様御仕置大方ハ能御座候得共、しゆれん乃臣共ハ御座候て、御しハき風ニ成候事、年中之御費拾貫目式拾貫目之儀ニて御しハき御名之出申事、勿躰至極も無之事ニ候との義、今一ヶ条大方此類右ニヶ条存寄心底ヲ不残書上候段尤之由

一 上ニハ数年儒道之御志御座候得共、御近習之者ヲ初学問之志無之事、人ことに悪敷事共存間敷候へ共、上之御好ニ合へつらい候なと、人々之譏りヲいやかり候と相見へ候、上ニハ道ノ御志御座候ニ、御近習之者ヲ初学問ヲ不仕処ハそしらる間敷候哉、何れこそしられ候ならば上之御志と同しくそしらるゝならば忠臣之類ニも可參候哉との事

一 小身ニ而不苦者ハ御勘定聞ニて候、小身成者ヲ四人程被仰付、老入宛ハ江戸江御供、御留守ニも被遣候ハ、跡先之様子ヲも存シ、御用之埒も能有御座候との事

右色々全義有、外存ルと違、惣而御用ニ懸り申様成者一円無之候へハ、身躰之高下御極メ被成候事ハ不成義ニ候、御勘定聞四人被仰付、江戸へも被召連候へとの義ハ一段可然義之由

一 御銀奉行式人へ御足米被下儀銀払仕ル年計年替りニ被下候、一年ハ銀払ヲ仕、翌年ハ御勘定ヲ仕候得ハ、兩年共ニ御足米可被下義との事

右全義在之、書上ケ申所も尤二候、唯今迄御足米被下來候者

ヲ御役領ニ被仰付候ハ、御銀奉行ヲも御役領ニ被成可然由

一大坂江御米払ニ被遣者、御擬作之儀今少宜ク可被仰付義二候ハん哉、近キ大坂江可参方ハ遠キ江戸へ参度との儀

右全義在之、大坂米払江之御擬作之義、烈座分明ニ覺不申候

二付、大坂へ先年参候御徒横目共ニ相尋、明日全義可仕由、

武兵衛・重二郎・半右衛門ニ伊賀・猪右衛門被申渡ル

八月十八日之評定

一 鈴田武兵衛申候ハ、昨日被仰付候大坂御米払之者御擬作之儀ニ付、

御徒横目松嶋兵太夫ニ様子相尋候、御米払共ニ御扶持方江戸並ニ

被下候、其上何か為御用之三人足老人被下候、別ニ勝手造作参ル

義ニ而ハ無之候、併御銀など御蔵方之出シ入など仕ル時ハ、大方

自身も取あつかいなど仕躰ニ候、殊外骨折申由兵大夫申候旨

一 江戸へ被遣ル御用人小作事御奉行御勘定聞などハ、江戸ニ而人も

入不申候、早ク御用之品被仰聞候義銘々勝手ニ能御座候との儀

全義書上候通尤二候、人計ニ不限御供などニ被召連者ハ衣類

其外諸事之用意違申事ニ候由、何茂申候

一大坂方一条様江御銀参候節、前々ハ御米払老人宛持参仕候、只今

ハ柳十郎兵衛渡り人足輕一人宛持参仕候、若不慮も在之候得ハ御

外聞も如何ニ候との書上

全義在之、書上候通尤二候、京都平井安兵衛方銀子取二人

ヲ下シ申躰ニ候、左様之儀ニ而御米払共ハ不参候哉、京方請

取人不参候節ハ、御米払老人宛持参候而も可然候、但式貫目

三貫目之銀子参候とて毎度御米払共参候事も難儀成事ニ候、

心ヲ付念ヲ入候様ニ申渡シ可然由

一 五百石已下ニ京銀御借被成候儀、前廉も借り申候者ハ取前之銀高

よりハへり申様ニ書出候故、京銀計ニ而ハ借銀かいかゝり不残払

候事難成候故、高利之他借仕、借銀いゑ不申候、借銀高有次第如

何程ニ而も書上御借被成候様ニ仕度との儀

色々全義在之、京銀ハ返弁之年数定り在之事ニ候、京銀大借

り仕候てハ、老年く、之出シ銀多ク候故、勝手之作廻不成候

京銀少ク借ル者ハ一年く、之出シ銀少ク候故、跡之作廻仕能

定り之年数にて埒明申事ニ候得ハ、兎角一才ニハ難申候、京

銀ヲ 殿様へ御借り被成、京銀同事之利足にて御城銀御借シ

被成、大借銀在之者ニハ年数ヲ御延御借シ被成候ハ、可然

儀ニ御座候ハん哉と申者共在之、此儀尤ニ而候ハんかとの事

一 京銀之事、御家中振舞之事、書加へたるケ条在之、京銀之儀借銀

有次第御借シ被成、何とそ又無余儀子細も候て借銀出来候ハ、

相組中として救立候様ニ被仰付候て可然候ハん哉との事

色々全義有之、相組中として救之儀、銀子ヲ出シ不申候得ハ

不成事候、公儀方相組として救候様ニこの義も不成事ニ候

但相組中肝煎何とそ仕候様ニと在之程ニハ苦間敷候哉、此儀

ハ御御番頭共寄合ヲ仕、相談之上にて様子聞召被上、御了簡

も有之可然候ハん哉

一 在々大庄屋之子共老人宛被召出、其郡々万事耕作之触、又郡之御

用之事ニ被召出候ハ、親共有難存、郡々御仕置堅固ニ可奉守と

存候、何事そノ時ハ人質ノ為旁可然儀ニ御座候ハんかとの事

色々全義有之、書上之通尤ニハ候へ共、大庄屋之子共被召出

可被召遣様子も難心得候、郡奉行之足輕在鉄炮など之位ニ被

召出候てハ忝も奉存間敷候由、又在郷ニ其俣御置候て御扶持方にて被下可然かとの全義^⑤も有之候へ共、尤人ニハより申事ニ候得共、御扶持人顔ヲ仕、結句在ノさまたけニも成可申候哉、御陣之時ハ迎御供ニハ被召出之御定ニ而御座候へハ、人質ノ為ニハ何も同事之事ニ候、大庄屋ニ被下米唯今迄ハ三石にて候、骨ヲ折申儀ニ御座候へハ、五石ニも被成可被遣儀ニ御座候はん哉、子共ヲ被召出候義ハ如何可有之候はん哉、此段御郡奉行共罷出候節猶又全義可有之由

一前廉も京銀御借シ又逼塞なとも仕候儀ハ、御前江申上候共成間敷と存居申候、大借銀有之者京銀御借シ被成、物成之内三分一か半分年々ニ返上仕候様ニ被仰付候ハ、上方之町人迄有難可奉存由

全義前ニ在之京銀之と同事

一借銀之公事ハ江戸御町奉行衆も御聞不被成、喜左衛門も取合不申、後ニ八元共ニ捨り申との事

尤ニ候へ共何とも可被仰付義も無之儀之由

一御家中振舞并祝言道具之事御法度堅ク立申様ニとの事、一度被仰出ル御法之儀同事ヲ又改被仰出候儀も如何ニ候、人々ニ相嗜弥堅ク相守候様ニ可然由

八月十九日之評定

一江戸御留守之時分御国にて何ぞニ付御褒美被下候儀、評定所ニ而全義など之、御老中指引遣シ被申儀如何可有之候哉、江戸江御窺江戸ハ被仰下候様ニ御座候ハ、一入忝かり可申との事

色々全義在之、伊賀被申候ハ、御褒美之儀急ニ被下可然事も

在之候、又殿様ハ被下候と在之候てハ、少分之儀又過分ニ可被下儀ニ而も無之など、申品も有之候、事ニハ可申事ニ候得共、毎度伺候てハ延引之儀も可有之候、委細之儀老中心得て遣候ても苦間敷儀かと被申候、何れも申候ハ、御尤之儀ニ候、事ニハ御伺、品ニハ御老中御心得ニ而被遣段可然義と申候

一当町ニ居申候上手之医者針立小兒医者などに乗物昇ヲ被下候様ニ仕度事ニ候、町医者ニ而も上手医者者方々懸廻り申候ニ乗物昇無之故、遠キ所江ハ呼候ても不參、下手之療治ニかゝり迷惑仕候との事

色々僉議有り、町医者乗物昇被遣候と在之儀も何と哉覽如何ニ候、縦乗物かき被下候而も、存様ニかけ廻り候事ハ不成事候、町医者いかほど多ク有之候とても時敷候医者ハ多ク無之候、式人三人ニ乗物かき被下候とても方々行渡り候様ニハ有之間敷由、又御扶持人之医者も軽キもの、所江ハ頼候ても見廻候事も大形之儀ニ而ハ無之候、御歩行之者など煩候とても頭共ヲ頼様々申見申候とても、其後精をも出シ不申候へハ、末々ハ下手之療治ニかゝり候外ハ無之候、不便なる事ニ候何とぞ被仰付様も可在之事ニ候はん哉、他国ニハ所々誰か薬ヲ被下、誰か薬ニ而本復仕候など、煩候者之方ハ公儀江書上、病人数多ク療治仕候者ニハ其ニ随ひ薬種代ヲ被下方も有之、精ヲ出シ候様ニ承候由、森半右衛門申候、僉議之上難病人ヲ直シ候者ハ頭々江病人方々書出させ可然由

一男女奉公人出替り同事ニ候故、不行義も有之候、其上小身なる者ハ男女同時ニ罷出召仕候者ニも事ヲかぎ候、女ハ三月九月と成共

相極り候ハ、他国ニてもなぐれ候奉公人も爰元江参へく候、又爰元ニてなくれ候者他国ハ出替り早ク候へハ、他国江参候事ニも在之間敷候、旁以可然候半との事

色々僉議有之、女出替り之儀先年も御沙汰有之候、男女出替り二月二日一同ニて悪敷事多ク可有之様ニ候へ共、三月ニ成候て御歩行之者など未々ニ至迷惑可仕候、御歩行などハ大形ハ毎年御供ニ参候宿ニ妻子ヲ置、下女老人ならてハ召仕不申候者、三月中旬ニハ江戸御参勤ニて御先江参、又御供ニ罷越候者老人之下女ヲも未召抱、女老人宿ニ置参候事迷惑仕にて可有之候、其上御立前江戸用意仕廻候節、出替りニ成候事も可有之候得ハ、小身なる者ハ迷惑仕にて可有之由申者とも有之、先前々之通ニ成申候由、亦僉議ニ三月ニ成候ハ、下女ヲ未不召抱、女老人留守ニ置候義如何と有之義尤ニ候へとも、三月ニ不限八月ニハ江戸之留守之内出替りニ候得ハ、唯今迄も女老人に成候事ハ可有之事ニ候、兎角男女同時之出替りハ不亘事とも多ク候との僉議にて、男ハ二月二日、女ハ二月十五日可然由、先今日之評議治定

一岡山水拔支、土屋敷ニも迷惑仕者共多ク御座候、道奉行被仰付、道橋水拔など能仕候様ニとの事

水拔道などの事、御普請奉行時々見廻り可申付候、橋之儀ハ樋奉行手前ヲ申付可然事、下奉行無之候て不成儀ニ候ハ、其品に随ひ御普請奉行可申付由、以上

八月廿日之評定

一御役を仕候御鉄炮之者、唯今屋敷無御座候、尤年中大方郡ニ居

申候得とも、又岡山ニ居申候組も御座候、亦ハ御鉄炮不殘冬春ニ三ヶ月ハ岡山ニ罷有候、屋敷無之借屋ヲ借り罷有由御座候、其故頭々も鉄炮之者之面をも睨と見知り不申候由、又岡山ニ居申候内ニも方々ニ居申候故、御普請奉行又ハ頭共呼集メ申時も中々急にあつめられ不申由、旁以屋敷ヲ可被下義ニ御座候ハん哉、前々ハ老人ニ式畝宛被下候、只今も御持筒ニハ式畝宛被下候、御役仕ル鉄炮ハ大方郡に居申事ニ候間、老畝宛被下ルか又ハ御長屋ヲ口々ニ被仰付、一組切ニ成共可被遣儀ニ御座候はん哉との事

色々僉議有之、右書上之通御役鉄炮共ニも前々ハ屋敷被下候得共、年中大方在郷ニ罷有、其上田地をも持妻子をも在郷ニ置、爰許之屋敷ハ明キ候て居申候故、屋敷被召上ル事ニ候、今とても同事可為候、尤間ニハ爰許江引越候様ニ被仰付候ハ、屋敷不被下よりも結句迷惑仕候者多ク可有之候、御長屋のこたくニ一組切りニ被仰付候とも或ハ一組ニ、三人も妻子ヲ引越置、残ル者とも冬春大勢参候て居申、乱れ成事も可有之も不知レ事ニ候、亦明ケ候て置候ニ屋敷被遣も無専様ニ候、然れとも云上ケ候通も又尤ニ候、此義ハ内々書上ケ之趣ニ申様ニ相聞候など、色々何も申候て見申候へ共、落着無之、前々拾五人分ニ被下候屋敷之分ヲ三十人組ニ被下、十人分ヲ式拾人組江被遣候ハん哉、拾人分ヲ三十人組江被遣候程ニ而も苦間敷候、兎角少にても被遣候様ニ可有御座義ニ候ハん哉と申者とも多ク候事

一御家中ニ殊外犬はやり申候、高知犬すぎの方へ出入仕ル者ハ御預ケ候へなど、申、式疋も三疋も預り居申者も御座候、離レ大盗ニ入何茂迷惑仕候、犬之はやり候事ハよからぬ義と昔も申候との義

色々全義有之、犬飼候事御法度と可被仰付義にても無之候、高知之者共申合かうじ不申候様ニ仕候ハ、自然と犬はやり候事も止可申候哉、盗犬とも多ク人之屋敷の壁を堀物ヲ盗喰迷惑仕由ニ候間、かけ候て飼申様ニ可然候はん哉、はなれ犬盗ニ入候ハ殺シ候様ニ御老中心得にて被申付可然候半哉と申候、又申候ハ、自今已後ハ若キ者など只と岩乗ためしニ罷出候事も難成、殺生などニ參ルためニ飼可申と存ル者ハ、頭中迄相理り飼申様ニ在之候ても能御座候はん哉とも申候

一 死人土葬ニ仕候様ニ被仰付候様ことの義
全義有之、其手く之奉行共心得可有事ニ候、從 公儀急度被仰付義にてハ有之間敷由何茂申候

一 在々江御出シ被成候御普請奉行、功者なる者一郡ニ志人宛在宅被仰付、御普請所御預ケ被成、外ニ志人ツ、年々御加へ被成被仰付候て可然御座候はん哉、式人宛被仰付候へ共、其年扨ニ仕のき之様ニ御座候故、実ハ鼠走ニ可有御座候、在宅之者ハ身ニ引請、仮夫役入増候共後々迄続候様ニ念入申様ニ可有御座候儀との事

色々全義有之、在々之御普請御郡奉行及見、御普請奉行と令相談申付ル筈ニ候、先唯今迄之通ニ被仰付、郡奉行手ニ而もくろミがたく存ル程之義ハ、岡山江申越、御普請大奉行罷出令相談候様ニ可然御座候はん哉、又御普請大奉行共郡分ヲ被仰付、一年ニ一度宛成共見廻り候様ニ被仰付可然由

一 惣別御鉄炮御役人習悪敷、大だうにて奉行をまかるしめ、己か心に不応事ハ奉行之申付をも承引不仕候由承候、御鉄炮計大だう成にて有之間敷候へとも、御鉄炮と申名ニより風俗之様ニ成来候、第一か様之心得にて候故、大分御役御損參候由承候、在郷鉄炮之

小頭不断何之用も無之、頭々之仕者之様ニ成候て居申候、是ヲ志人宛御横目ニ被仰付、郡々御普請所江罷出、役人之仕形を見届ケ、勝して大だう成者ハ急度被仰付候様ニ御座候ハ、可然候半哉との事

色々僉議有之、小頭ヲ御横目と有之儀如何ニ候、御歩行横目など被遣儀も数多入候事ニ御座候へハ、難被成儀ニ候、先々御横目ハ御無用ニ被成、頭々堅ク申付、御奉行共見のがしに不仕、大着なる者有之におゐてハ、公儀江申上候様ニ被仰渡、先々様子御覽被成候様ニ可在之事ニ候半哉と申候、又小頭御横目ニ被仰付御尤と申者も有之

八月廿一日評定

一 村代官共大方ハ能候へ共、人ニ方細ニ無之も有之由承候、随分打はまり情ヲ出シ候様ニ御座候ハ、可然候はんとの事

色々僉議、書上候通村代官細ニ無之候てハ救米など之義旁ニ付事不參儀ニ候、随分打はまり情ヲ出シ候様ニ御代官頭とも常々堅申付候様ニ可然由

一 岡山万事直段高直ニ候、北国方屋柵木鹿料など積候舟參候節、材木屋手前ニ買置候屋柵木鹿料沢山三有之時ハ、高嶋辺迄罷出川口江舟ヲ不入、追戻シ材木屋手前にて買買仕候、か様之儀其外之売物ニも有之候、薪着なども六、七年此方ハ殊外高直ニ成候との事

色々僉議有之、岡田喜左衛門申候ハ、北国舟參候節時ニ方大分之屋柵木鹿料にて候故、材木屋共金銀無之、不残買切り候義ハ不成事ニ候故、舟戻り候事も在之由ニ候、か様之義ヲ追

戻シ申候と申物にて可有御座候哉、其外之売物共左様之儀可有之とハ不存候、若又書上ケ之通ニ候ハ、大キニ不届事ニ候、急度御成敗被仰付候ても不苦儀ニ候、小串牛窓辺ニ隠シ横目ヲ被遣、御聞届ケ可被成義ニ御座候半哉と申候、亦北国舟參問屋方江申来候者田口五左衛門方江問屋方より早々申来、御家中入用之屋祢木鹿料書付ヲ取、御城之御用御家中入用程取候て、残ル分町人取候様ニ可然候ハん哉、御徒横目ヲ出シ割符之様子も見届ケ、問屋罷出相定候直段之様子ヲも承届ケ候様ニ有之候ハ、可然候ハん哉と申者も有之、色々全義有之といへ共、治定分りかたし

八月廿二日今日方御郡奉行罷出ル

出座之御郡奉行

尾関与次右衛門 庄野市右衛門 片岡次郎太夫
塩川吉太夫 武田左吉 吉崎甚兵衛
前田段右衛門 伊藤左五右衛門 齋木四郎左衛門
渡部助左衛門 国枝平助
其外相定罷出ル人数、伊賀・猪右衛門ヲ初貳拾人、替りくニ罷出ル者、今日之出座十六人

都合列座四拾七人

一浦々加子米差上ケ申候上ニ、加子雇出シ申候故、賃銀之相銀を出シ迷惑仕候との事、西村源五郎申候ハ、加子米之儀先々先日被仰付候通ニ被成、一兩年も様子御覽可被成かと申候、此義ハ去ル廿一日式日之寄合之節西村源五郎此事申出シ、色々御全義有之候得とも、何廉つかへ申義共在之ニ付、其後御船奉行とも出合、度々

全義御座候、加子米をハ御免被成、加子ヲハ掛り来り之浦々出シ加子吉人二一日ニ老升宛之御扶持方計可被下ニ相究り候、依之西村源五郎右之通申候也、但加子米御免ニ付村々能所も御座候所ニ方取前々悪キ所も御座候、児嶋などハ殊外迷惑仕候由、是者加子やとひ候賃銀ニ迷惑仕候との事、右之品々御郡奉行とも申候て全義有之候へ共、落着仕かたし

一御鷹場吉井之川方西を御法度ニ被仰付、東ハ御免被成候様ニ、又老中自分に殺生留置可被申

御鷹場之儀末々之村ハ御赦免被成候ても能有之候、吉井之川切りと有之義如何可有之候哉、老中留場之事津田重二郎申候ハ、此度改書付ヲいたし在所廻り之外ハ留ヲ破り被申候様ニ可然かと申候、老中可被申合由

一御老中并御家中役人之儀、日之長キ時分などハ手前之普請亦ハ役人銘々之自由ヲ調引込候故、普請場二人曾而無之儀多ク御座候日も短ク手前二人不入時分、一度ニ仕理候とて大分役人出、御普請之作廻殊外悪敷御座候との事

伊賀・猪右衛門被申候ハ、先日申渡シ候通役人共不叶用所有之時ハ、奉行江相理り引込可然由、以上

八月廿三日 御郡奉行岩根源左衛門今日より初而罷出ル

一郡々林ハ持掛り、野山之分ハ割符ニ被仰付、田島之養ひ野山方仕候様ニとの事

一今一ヶ条、右同事、右僉議

一吉崎甚兵衛申候ハ、一段可然儀之様ニ存候、然共高二心シ割符と有之儀ハ大分之義割符成かたき程ニ可有之候哉、御国中入合

二可被仰付候哉

一庄野市右衛門申候ハ、御国中入相と有之候ても高ヲ作り候百姓ハ人数多ク持申候故、割符之心にてハ御座候へ共、三野郡ハ岡山近ク候故、岡山之こやしを以作仕来り候、津高郡ハ野山にて草やしなひニ仕候所、三野郡乃野山ヲかり取候ハ、是も順トハ不被申候由

一亦甚兵衛申候ハ、野山割符之儀傍示御さし、右ニ申候通大分之事ニて如何と存候得共、又成間敷と申儀ニても無之候、一年もかゝり候ハ、何とぞ割符にも成可申候哉

一亦市右衛門申候ハ、傍示を指割符之儀ハ兎角難成可有之候、郡切りニ入相に被仰付候てハ可然候ハん哉

一齋木四郎左衛門申候ハ、御国中入相と御座候てハ、病人など有之候へハ其者ハかり候事も不成候、兎角末々迄順ニトハ中々成かたく候、とかく郡切りニ入相ニ被仰付候ハん哉

一都志源右衛門申候ハ、郡切りと有之候へハ浜野村も平瀬村も同郡ニて候、浜野辺より当年平瀬江参草ヲ不茹取候ハ、来年ハ平瀬ハ何とも可仕様有之間敷候、其上所に於すくなく山林にてすぎ来り候村も御座候、入相と有之候てハ其者ハ何共迷惑可仕由

一前田段右衛門申候ハ、唯今入相ニて無之候てさへ草をも根共ニ掘返し候様ニ御座候、入相ニ罷成候者根共ニ掘り、後々ハ山ハ草も有之間敷候由

一渡辺助左衛門申候ハ、山ヲ入相ニ被仰付候ハ、人数を持候ものハ皆々切取、遠所之人数もすくなき者ハ取候事成間敷候由

一国枝平助申候ハ、何とぞ又被仰付様も可有之候哉、平介浅口郡

江参候節迄ハ身代能者計山ヲ持居申候、其村々にて牛飼場ヲ割

符仕遣シ、山之儀ニ付出入かましき義理非とも申来ましく候、松ヲ能植可申候、悪敷林シ候者之山ハ能はやし候者之山ニ可仕由申付候得者、山も能は糸山之出入も曾而無御座候由

一都志源右衛門申候ハ、それハ一村之事ニ候、牛飼場ハ割候て遣し候、一郡ハ難仕候由

一庄野市右衛門申候ハ、入相と御座候ても五里七里脇方ハ不参候壹里弍里ノ内ニて御座候由申候

一西村源五郎申候ハ、先唯今之分ニて御置被成、様子御覽可被成候哉、迎様子御覽可被成ならば、唯今之分ニて御覽被成、重而御郡奉行共百姓之様子をも承、銘々存寄をも申上候様ニ可然御座候ハん哉

一棺之事十六日之評定之全義同事

一善事之褒美悪事之罪科共ニ五人組に掛り候様ニ可然御座候半トの事

右僉議

一書上ケ申通善事之褒美悪事之罪科共ニ五人組江掛り、五人組之内ニ悪キ事有之者候ハ、五人組乃吳見ヲ仕、吳見ニかゝわらざるもの於有之ハ、相理り候様ニ御座候ハ可然候半哉と御郡奉行とも大形一同ニ申候、国枝平介申候ハ、唯今迄ハ五人組ヲはねられ候ものも又五人組江入レ不申候へハ成不申候、無左候得ハ万ノしまり難仕候、平介浅口郡江参候以後ハ五人組はねられ候者ハ其假置候へ、亦左様之者出来候節悪人組と定、又組ヲ可仕由申付置候由一郡々講釈仕候者壹人宛被召置可然トの事、御郡奉行とも一同ニ尤之由、僉議之究り去ル十六日

一平免之事去ル十六日ニ僉議濟

一兩年取実無之、当年ハ大事之年ニて候との事

何茂申候ハ、御郡奉行共差引申付ケ候方外ハ無之事、脇方兎角之儀被申由

一当春方御役人五百人味進負候内、本儀拾俵宛ニて被召抱、在之破損被仰付候様ニとの事

右僉議書上之通も尤ニハ候得共、御役人五百人被召抱、在之破損可被仰付より八十七日之評定之節御僉議ニ出候書付ノことク郡ニ日用米百石宛被下置、此日用米にて埋土ヲ仕り、麦田ニ可成所ハ麦田ニ仕候ハ、永代之儀ニ候、御役五百人被召抱候ハ、実ニハ奉公人もすくなく成可申候、御普請之墓之参候も日用米之方増候て可在之由、大かた一同ニ申候

一検見之事功者ヲ式拾人程撰ビ被成、春夏秋之けいき見竟と有之ケ条

右全議

一前田段右衛門申候ハ、春より見廻り候とても田之儀ハ少之間ニも違申事ニ候、春より見廻りたりニ成申儀ニても無之由

一都志源右衛門申候ハ、書上之通之検見之仕様ハ悪敷御座候、左様ニ仕候て殊外手おくれニ成可申候

一渡辺助左衛門申候ハ、作州検見之仕様書上之ことクニ御座候、加様ニ仕候ハ源右衛門申候通手おくれニ成可申候、麦時候時分など十日十五日おくれ候得ハ殊外悪敷事之由

一庄野市右衛門申候ハ、麦ハ一日おくれニても大ニ悪ク御座候、秋免ニ仕候事一年ハ能も可有御座候、続テ秋免ハ作之はけミ不可然由、土免ハ少高ク置候分ハ後仕能候、安ク置候てハ後ニ仕にく、

候由申候、川村平太兵衛なども同事ニ申候、岩根源左衛門申候ハ、

餘高ク置候へハ作ニ精ヲ出シ候ても土免方能仕候事ハ難成候と存候得ハ、作ニ精ヲ出シ候事無之候由、尾関与次右衛門申候ハ、土免高ク置候へハ毎年検見ニ成申候故、高ク置候と申儀も仕かたク候由

一救米之事

右僉議

一吉崎甚兵衛申候ハ、御郡奉行心得次第銀ニ而成とも米ニて成共、存ルまゝに被仰付可然儀ニ御座候ハん哉、所ニ方様子ニより候事ニ候得者、兎角一同ニハ参間敷候由、御郡奉行共大形右同意ニ申候

一郡ニ大庄屋之子共被召出候様ニとの事、去ル十八日之御僉議之通尤ニ候、大庄屋給米少ク候間、式分増被遣候方能可有御座候由何茂申候

一在之御普請奉行在宅之事、去ル十八日御評定ニ御僉議之通ニ先々只今迄之通ニ被仰付、進ミ在之様ニ被成候儀可然御座候ハん哉と何茂申候、庄野市右衛門申候ハ、御普請奉行計ニて仕ニ而ハ無御座、御郡奉行共相談仕候由

一田地返シ之事唯今取返し遣シ候と在之儀ハ不成事ニ候由、何茂一同ニ申候

一在之江御横目ヲ可被遣かとの事、在之之事数年、御耳ニ不立事共も可有御座事ニ候、諸人之心得之ため旁御歩行横目御廻し被成儀ハいかにも御尤之儀と何茂一同ニ申候

一年内皆済之事書上之通尤之様ニも候得とも、度々僉議在之、年内皆済ニ究り候事ニ候、兎角年内皆済能御座候由何も大かた一同ニ

申候、式升麦も只今迄之通ニ利ヲ付ケ被召上候方能御座候由、以上

八月廿四日

一池田美作・池田藤右衛門・稲葉四郎右衛門・柴田市左衛門
一在郷村ニ乃田畠分ニ過作り申候、町ニ在郷方之引籠ミさるふり賃持多ク相見へ申候、在郷へ引返し作仕らせ候ハ、可然候半哉との事

右僉議

一西村源五郎申候ハ、書上申候処尤ニ存候由
一前田段右衛門申候ハ、在郷方岡山町江罷出候者ハ、田地も無之作り可仕様も無之三付、町江被出ル者多可有御座候、唯今在郷へ入レ古地之田地を分ケ遣シ不申候ハ、罷成間敷候、其段如何二候ハん哉
一岡田喜左衛門申候ハ、岡山町ニ罷有候者在郷へ御入レ被成候共、作仕候道具以下調不被遣候ハ、罷成間敷候、大分之儀如何可有御座候哉、庄野市右衛門も同事ニ申候
一石川善右衛門申候ハ、喜左衛門申通作道具ノ儀ハ不及申ニ、家迄被成不被遣候ハ、成間敷候、大分之御造作成事二候
一藤岡八郎兵衛申候ハ、岡山町ニ罷在候在郷之者、妻子ヲも在郷ニハ置不申、町ニ置候得者、在所江之したしミもなく、万ニ付不可然儀多ク御座候様ニ存候、御野郡などニハ弥人も少ク御座候、町ニ出候者ヲ御入レ被成能有御座事と存候由
一都志源右衛門申候ハ、御野郡などの様二人之すくなき所へハ他郡之者ヲ成共御入レ被成可然存候、田地ヲ分ケ候ニ不及、明キ候て

居申候田地多御座候、其者之在所くニ御引籠セ被成候てハ田地無之候て町江罷出候者可仕様有之間敷候

一岡田喜左衛門申候ハ、洪水以後之引籠ミ凡千五百人程も在之候在々吟味いたし引籠ミ作も可成者ハ引籠セ可然候、おしなへてと有之候てハ如何可有之候哉と申候、在々江引籠勝手ニ能者ハ御郡奉行を改引返し候様ニ御郡奉行岡田喜左衛門など相談ニ而可然事之由僉議落着

一草を刈こやしにて有之義、去ル十六日之評定野山割符之全儀（註）と同事

一草臥申百姓之内ニ而も無抛義ニ而勝手迷惑仕候者、一在所之内ニハ五、三人程も有之、御郡奉行吟味仕救米遣シ候ニ、拾石作り候百姓三式、三石遣シ候へハ、大分之救ニて候得とも、跡へひかれ其年之足りニハ成候へ共、以來之助ケニ不成候、ケ様之者をハ吟味之上にて未進捨遣し候敷、或ハたをれ次第散田ニ成とも仕候様ニ可然かとの事

右僉議

一御郡奉行共申候者、左様之吟味其所に心をつくさる御郡奉行ハ有之間敷候得者、外方存様ニハ不成儀共多ク御座候、大分之未進ニ皆捨遣シ候てハ限もなき事二候、亦左様ニ仕候ハ弥未進をも仕ルニ而可有之候、此段書上之通ニハ不成事二候、石川善右衛門申候ハ、書上之通ニ仕候者当年四ツ成と存候共、三ツ成も有之間敷由、庄野市右衛門申候ハ、志ツ成下ケ遣シ候とても一返ニ勝手能成申候てハ在之間敷由
一漆之木御植させ置被成候事、当分御用ニ不立候とても後々御国之宝ニて候との事、不及僉議

一当年大丸雪降申候村へ麦銀など御借シ被成候へとも、利を付御取被成候故、勝手之為ニ不成候、諸事御借米よひつきく取レ申候、五、七年切ニ成共なくつしニ成とも銀御かし被成候ハ、御救にも成可申候由

大あられ降候儀ハ惣様之儀ニ而無之候、返上之節其所之御郡奉行右之段可申出之旨、伊賀・猪右衛門被申渡

一寛文四年ハ五里着被召上候、津高加茂之儀ハ、他所ニかハリ津出シニ里三里船路拾四、五里も御座候、如前々之可被仰付義かとの事

右僉議

一河村平太兵衛・都志源右衛門申候ハ、此儀洪水已後度々僉議在之、兎角被召上候筈ニ而可有之と治定仕事ニ候由申候、齋木四郎左衛門申候ハ、此義御郡奉行中間ニても私度々申候、武刃様之御時分ハ五里着被下り候事ニ候間、今以可被下儀かと申候へ共、何茂一同ニ五里着被下間敷義と申ニ付、先其通ニ仕置候由、御代官頭共申候ハ、邑久郡など拾里之上も在之所御座候、津高など計江可被遣道理無之由、猪右衛門なども尤之由

一盜賊之本ハ子共なと穴いち・けんねし・ほうひきあしき習ひの本と書出シ候事

右僉議、尤之事ニ候、ほうひき・けんねし郡奉行共申付、やめさせ可然之由

一年内皆済之事、去ル廿二日之評定全義済

一御年貢舟ニ而参候御米ハ下ノ御蔵、馬ニて参候御米ハ石山之御蔵、其手寄く江弘候様ニ可然との事

一片山勘左衛門申候者、左様之為ニ先年下ニ御蔵被仰付候へ共、御

持方ニ渡り候御米ハ上之御蔵、大坂江之上り米ハ下ノ御蔵と分り不申候へハ、不罷成候、亦御詰米段々品替り申事ニ候、或ハ百俵之内五拾俵能米御座候得者下之御蔵江弘、残ル五拾俵を上之御蔵江弘候ハてハ不成事ニ候、左様ニ候得ハ百姓迷惑仕事ニ候由、御代官頭共申候者、左様ニハ不成事ニ候、唯今迄之通ニ被仰付可然由

一御蔵ニ納り候大豆、所ニ作り候大豆ハ御年貢ニ不立、町ニ而作州大豆を買候て御年貢ニ立申候故、相銀出シ百姓迷惑仕候との事

右僉議、此段百姓迷惑仕候所尤ニ候、夏大豆ニても秋大豆ニても所々ニ出来候物を代官改、御蔵江弘ハせ可然由、伊賀・猪右衛門被申候

猪右衛門被申候

一今程ハ畠ニ菜種を多ク作り候故、麦少ク、秋の初よりへり刈を仕候、菜種を多ク作り不申候様ニ可然候半かとの事

右僉議

一御郡奉行共申候ハ、菜種を作り候へ者菜種を売候て御年貢を立申候、銘々勝手に能候故作り申候、惣たゞいを見申所ハ喰物少ク出来候積リニて候、爰以書上ケ申候と見へ申候得共、左様之儀ハ不成事ニ候、其上しつけ地にハ麦ハ悪ク候、菜種者しつけ地能候唯今迄之通加様之義ハ百姓勝手次第可然候半由

一とくいかり百姓之為ニ悪ク候との事

右僉議

一吉崎甚兵衛申候ハ、所ニハより可申候へ共、とくい有之如何ニも能御座候、其上むさと高利ニてはぎ取候様ニ仕候得者百姓とくいに付不申由

一西村源五郎・岩根源左衛門申候ハ、とくい無之候てハ又不成事ニ

候

一都志源右衛門申候者、とくい御やめ可被成との事ニ候ハ、只今銀式、三貫目も在郷へ不被遣候てハ不成事之由

一岩根源左衛門申候ハ、兎角とくい無之候てハ不成儀ニ候、とくいのかし様ニハ善悪可有之候、能かし様ニハ御褒美も被遣候様ニ御座候ハ、能有御座候哉、又とくい能御座候ても借り手ニ悪キか多ク可有之候、左様之ハ亦とくいノ悪キ様ニも相聞え可申候、左候へハとくい悪キと僉議も不成由申者も御座候、岩根申所尤之由

一在る諸商人御法度ニ付迷惑仕候との事

右僉議

一西村源五郎申候ハ、諸商人御法度ニ付病者成者などハ迷惑可仕事ニ候、病人などニハ札ヲ遣シ候て他郡江不参候様ニ仕、其所にて之売買御免被成候ても苦間敷候ハん哉と申候

一吉崎甚兵衛申候ハ、諸商人在るニ有之儀百姓之為ニも大キニ悪敷儀にて候、札ヲ遣シ他郡江不参候様ニ有之候者、其所へ近郷方買ニ参、問屋之ことクニ成可申候、兎角取前之ことク御法度ニ被仰付可然候半由

一郡々庄屋検見之事、同穴之狐とうさん被掛候半と庄屋共存候故、きつく仕候付候て、ありき候者不機嫌なる躰故、弥強ク迷惑仕候との事

右僉議

一御郡奉行共何も申候ハ、庄屋検見如何にも能御座候、庄屋に任候計ニても無之、亦跡ヲ十村肝煎ニ見せ申候、其跡ヲ又御郡奉行共改申候、定り強キ目も御座候故、左様之所ハ舛にて用捨仕候、検

見之儀随分ろくに仕候由

一御国之乞食を他国江掛申義如何との事書上ケニ有之、御郡奉行とも申候者、御国之乞食他国江掛申候義惣而無之由

一浦々猫を仕候者共近年生魚船を拵、魚ヲ取候てハ生テ置、メ売ニ仕候故、看高直に御座候由承候、生置候へハ天氣之悪敷時も看有之候得共、不断高直成積り之由申候、生舟御止メさせ可然との事

右僉議

一池田美作・川村平太兵衛・西村源五郎・石川善右衛門・岩根源左衛門など申候ハ、書上ケ之通尤ニ候、生ケ舟御やめさせ被成可然由、森半右衛門申候ハ、看下直ニ成可申かとして生ケ船御留メさせ被成候儀産業に仕獵師迷惑仕事ニ候へハ、順成被仰付様ハ御座有間敷候哉、其上生ケ船留り候ハ、弥他国江売遣シ申ニ可有之候、左候ハ、下直ニ成申ニ可究共不存候由、津田重二郎・河村平太兵衛など申候ハ、前々有来り候儀ニ候ハ、只今御留メ被成儀如何ニ候、生舟之儀近年出来申候、兎角先々御留メ被成、御覽可被成哉と申候、伊賀・猪右衛門も生舟ハ留メ候て可然之由被申候

右僉議

一御郡奉行共申候ハ、人帳を仕置、御郡奉行共常々堅申付候由、森半右衛門申候ハ、御国ノ奉公人他国江抜ケ申儀多ク御座候と存候、江戸にて出替り之時分など他所ニ居申者御屋敷江参候て奉公望申者とも御座候と承候、江戸ニハ例年人奉行ヲ被仰付、出替り之時分ハ人奉行へ暇を遣候者をも召抱候者ヲも相届ケ、御国江上り申者をも主人方人奉行送り状ヲ取寄せ申候故、唯今ハ江戸方奉公人之扱申儀ハさのミ御座有間敷候、去年も 五郎八様御供仕参り

候下、御姫様方之御家来之者共、方江御国方召抱遣候者など江戸

御人奉行江付ケ届ケ、慥ニ無之と相見ヘ申候ニ付、其段江戸にて

申上候、其以後、御姫様方之御家来、五郎八様御家来江も或ハ因

芻作州備中之御衆など奉公ニ罷出、其方江戸ニ居残り方江江抜

ケ申候て可有御座候、御郡奉行人帳ヲ以毎年出替り之時分ニ相改、

扶持ヲ放シ候者ヲハ御郡奉行江相届ケ候か亦ハ請人へ相届ケ、請

人方御郡奉行或ハ町ノ者ならハ御町奉行江相達、何方へも有付

候ハ、召抱候主人方御郡奉行江相届ケ候か又ハ是も請人方よ

り相達候様ニ仕り、帳面ニ置、途中ニ扶持を放シ候とも又ハ相

果候共、右之通ニ仕候ハ、走人ハ各別、さなきものハ他所へぬ

け候様ニハ有之間敷事ニ候ハん哉、若其上ニても他所へ抜ケ候者

有之候ハ、請人或ハ其村江かゝり候様ニ有之候て者しまりも可

有之候哉、亦御国にて奉公人抜ケ候様ニ有之候ハ、江戸計強ク

しまり候ても無専事と存候事、広キ儀ニ候へハ右之通ニ被仰付候

而も難成可有之様ニも候得共、又存候て見申候へハ、御代官銘々

御預ケ之村切ニ改候ハ、成申事にて可有御座様ニ存候由申候、

色々僉議有之候へとも、兎角左様ニハ成間敷と申者多ク治定不仕

候

一江戸江召連候下ニ召抱候節、請人之儀其所之御郡奉行江相届ケ候

て召連可申旨、先年被仰出候、奉公人其村之者ニても村之為不成、

町などへ罷出有之ものニハ、請に立候事無用と御郡奉行共申付ケ

候故、奉公人召抱候ニ相突、請人をも取候以後、御郡奉行江相届

ケ候ハ、請ニ立候事不罷成候と請人申ニ付、江戸へ参者俄ニ手

ヲ付キ迷惑仕候との事、色々全議有之、村之たよりに不成者にて

も其村之者にて請人も同心仕、請ニ立候ハ、御郡奉行共其分ニ

仕置可然事ニ候由

八月廿五日

一江戸御長屋割百五拾石取之馬持ニ、式間半被下候、中右仕切り候

へハ、下ニ居申所老間ならてハ無之候、人七人こミ合候て居申候、

馬も不持人も少キ百五拾石式百石之者ニ三間口被下も御座候、亦

道中路銀ハ被下候へ共、大坂方伏見迄之路銭ハ不被下候、此段如

何との事

右僉議

一貳百石百五拾石之馬も不持者ニ、三間口被下候儀覺無之候、御納

戸衆御長屋ニ三間口之一軒有之候、若加様之儀ニても候哉、是ハ

御本屋敷ニ居不申候へハ不成御役義にて候、其上先山百右衛門参

候時ハ、此御長屋広キ共不被申候、又ハ御細工之者去年ハ石尾喜

六と御長屋ニ居申候、此書上心得かたく候由、山内権左衛門など

も申候、大坂方伏見迄之路銭ハ不被下候由、勘左衛門申候、是ハ

何といたしたる事にて加様ニ候哉、大坂方伏見へハ御舟にて上り

申と有之儀ニ候哉、老ニても下ニノ舟ハ自分ニ借り申候、知行取

ニハ路銭銀計被遣候へハ、構無之候、無足之者へハ可被遣儀之由

一御歩行御用人之事、江戸にて御手廻ハ御供ニ罷出候ニ、御用ニかゝ

り申候故、御先少ク候、御手廻りのかゝり候御用ハ、御救之御用

にて候と相見へ申候、御すくい之儀ならハ御用ニかゝり不申候共、

御救も可有之事之由

右僉議

一森平右衛門申候ハ、御歩行之御用当分儀ハ各別、何か之御用ニ

かゝり候ニ、老人之心得にて申渡候儀無御座候、中間三人相談

御御歩行頭も申談、又ハ下横目共ニも様子承申付ル事候、書上

候段も理之様ニ相聞候へとも、こまか成儀ヲ不存候て書申候と相見へ申候、左様之御用ニ掛ケ可申御用人少ク御座候、是第一元ニて候、江戸ニて御救之御用と申ハ、御台所横目之儀ニて可有御座候、去年も御手廻り渡辺多左衛門・三神伝右衛門兩人、向御屋敷御台所横目 御前様御台所横目ニ申付候、唯今被召出候者御内所方御台所横目ニハ難申付候、亦餘若輩なる者も成かたかく候故、兩人ハ年頃も能候、其上渡辺多左衛門ハ病氣ニも罷成、御供なども難勤候、外ニ可申付者も無之候故、右之通ニ候、御手廻り候て御銀奉行ニ吉田弥五介申付候、是ハ勝手ニ悪キ御用ニて候へ共、去年之春御手廻リニ被仰付候故、其いさミも有之内ニ候へハ、苦シかるましきと相談仕り申渡候、外ハ細力成儀ハ存まし候へハ、書上之通も理り之様ニ候へとも、右之通之由申候、伊賀・猪右衛門尤之由被申候

一江戸ニて御家中之下ニ町江罷出候事ハ御法度、御長屋ハせはく候へハ、行水など仕候事も難成候、惣風呂之ことく入湯ニても被仰付候ハ、下ニ難有可奉存との事

右僉議

一入湯ヲ被仰付下ニ御入被成義ハ、不可然事ニ候、下ニ申事をも仕、火用心彼は無心元事ニ候、其上唯今も家中之若党共ヲハ惣風呂江御入被成候、是さへ込合自由ニ入候事不成由ニて、入不申若党多ク御座候、御家中之下ニ不残惣入湯ニ入候ハ、猥かハしき儀いかにも不可然事と何茂申候

一御足輕共只今迄ハ惣風呂ニ入不申候、御家中之若党共ヲも御入被成ル儀ニ候へハ、御足輕をハ惣風呂之仕舞ニ成とも御入可被成儀

かと申者御座候、此段ハ尤と申者多ク候事

一御家中買掛り御法度ニ被仰付、当座掛ニ被仰付候ハ、行ニ勝手之為ニも能可有との事、右色ニ僉議有之、可然事にてハ候へとも、立かね可申義ニ候、大借銀有之者など差当り何共可仕様有之間敷由申者とも多ク可有御座候事

一御勘定場之義万内引ニ御座候との事、不及僉議

一大奉行ニ、三人御座候、其下ニ小奉行御座候、其小奉行一方江参尋候得ハ、加様之事と申候、亦一方江参尋候へハ加様之事と申、埒明かね、下迷惑仕候、巷ヶ月ニ何度寄合ヲ仕御用人共尋候様ニ被成可然候半哉との事

右僉議

一御城詰仕候御用人ともハ日ニ御城ニて出合申事ニ候、御用人も御城江参埒明申事ニ候、其外之御用人共相仕くわほく致シ、諸事滞りなく下ノ迷惑不仕候様ニ心得可然由

一川口入船之事、御番所ニ所之者出候て有之、入舟之者と相對仕り、宿之上り切手ヲ取遣シ、錢ヲ取申候、外ハ見申候てハ御番所方錢ヲ取上り切手ヲ取遣し候様ニ御座候、他国之存所如何との事

右全義、唯今迄之通ニてハ御番所方質を取申様ニ可有之事ニ候、入舟之改ニ下番ヲ吉人被仰付、所之者番所ニ居不申候様

ニ仕候て可然由

一江戸へ大廻り候御米舟方上ケ、七日ほし申候、其内ニ雨降候得ハ亦七日ほし申候、其上ニ欠米ヲ込迷惑仕候との事

右僉議

一米干シ申義御蔵奉行見合ニ可然事、欠之儀合勺之吟味強すぎ不申様ニ御蔵奉行共相談仕可然候、近年江戸ニて御蔵奉行仕者ニ様子

相尋可然由、御歩行横目松嶋兵大夫呼出シ様子相尋候、御米ほし申儀七日ニ可究事ニても無之候、しめり御座候米ハかミ候て見申候ても知レ申事ニ候、しめりヲうち米をふくらかし廻シ能様ニ舟頭仕候事も御座候様ニ承候、しめり御座候米ハ干申迄幾日もほさせ、しめり無之米ハ其俣も請取候様ニ可然事ニ候、合勺之吟味前々つよく仕候てハ無之候由

一諸事公事之下聞ヲ被仰付可然との事

右僉議

一公事有之候得ハ、在郷なれハ御郡奉行、町なれハ御町奉行下聞ヲ仕り、其上唯今ハ御大横目出合承り、其上ニ伊賀・猪右衛門吟味仕り、扨御耳江入申義ニ候、然上ハ是則下聞ニて候、只今迄之通ニ可然由

一山下之内ニ掘抜井土（註）など可仕場所多ク有之間敷候、少シ被仰付候分ニてハ、少ニても水出候時分などハ汲候者多クせり合、何とも罷成間敷候、井土（註）ハ成可申儀ニ候者、水土ヲしかけ申度義ニ候由

八月廿六日

一江戸御供ニ被召連御中小性路銀七枚被下候、江戸ニて御大小性並ニ御供使才相勤申者ハ、着類以下大小性ニ不相替候、勝手迷惑仕候との事

右僉議

一安藤李・片山勘左衛門など申候ハ、書上之通尤ニ候、御増可被遣義之由申候、山内権左衛門・津田重二郎・森半右衛門など申候ハ、大小性之路錢ニ引合すくなきと申候てハ無之候、大小性之ハ御足

米ハ御国ニても被下候、江戸ハ參時路錢米貳拾石、外ニ被下物無之候、御中小性ニハ道中馬壹疋木賃舟渡シ已下被下、人足壹人御立之日ハ江戸中罷戻ル迄被下候、江戸御あてかい能中小性、悪キと申候てハ無之候へハ、下地小身ニて大小性同前ニ江戸ニて御供使相勤候へとも、勝手迷惑仕段ハ左様ニ可有之義と存候由、森半右衛門申候ハ、御中小性道中馬木賃舟渡シ江戸ニて被遣ル量所帶道具御人足何も被召上、右之積りを仕、其上ニ銀五枚にても六枚ニても多ク当り候様ニ増被遣候てハ如何御座候半哉、餘何角と細ニ御座候て事やかましく候、其上加様之儀ニ付候ても、或ハ量所帶道具相渡ス奉行、亦右之勘定又舟渡シ馬割諸事ニ付御用人も多ク入申候、其上江戸ニて相渡入所帶道具量など銘々勝手ニ不合、皆々仕替申候、ものことこまかにハ聞へ無専事ニ手間入申様ニ存候、量所帶道具已下 公儀より不被仰付候とても銘々手寄くへ憑調申儀ニ御座候由

右僉議、加様之義諸事御あてかい甲乙之事など御勘定場之帳ヲ御改、其上之御全義（註）ニ被成可然由

一無足御中小性国越シ之御使路銀之事、右同断
一貳百石方下之侍、只今之時分扶持無之者多ク御座候、御米御かし被成候者、難有可存候、亦平免三段程ニ被仰付、小身ほと平免能被下候様ニとの事

平免之事段ヲ立、小身程能被下候様ニ有之間敷事ニ候由

一御鉄炮之者同事之御支配ニて甲乙御座候、不審ニ存候との事

右僉議

一御足輕之御支配ハ 公儀方御定之通ニ遣し申ニて可有之候へとも、久々居申者年寄候とても扶持ヲ放シ候事も難仕、左様之儀ニ

付少甲乙も御座候哉と申者共も御座候事

一 江戸へ御参勤之砌、道中御宿ニ荷物ヲ多ク取込ざわかしく有之二付、荷物計置候下宿取申候宿賃ニ、銭式百文遣シ候、餘少分如何ニ候との事

書上之通尤ニ候、以来ハまし候様ニ可然事

一 御台所通之子共ニ江戸ニて増扶持不被下候、御人足迄も増シ扶持不被下候上ハ、通ノ子共ニハまし可被下儀との事

森半右衛門申候ハ、此義去春江戸御立前於評定所ニ僉議御座候、通之子共者後々ハ御歩行ニ被仰付候か或ハそれく之親々ノ役ニ被仰付か如何様何とそ品替申事ニ候、幼少ニて親之跡目被仰付、可仕御奉公も無之ニ付、当分之子共役ニ御台所へ詰申事ニ候、其上御台所ニ而朝夕ニ食被下、仮相煩而長屋ニ罷有候とても、賄ハ御台所より仕候、子とも役之御奉公ニて格不相定候上ハ、増

扶持など不被下候段尤之由、僉議治定仕候、然レ共只今又御全義之上まし扶持可被道道理ニ候者、取前之僉議之御構ハ無之事ニ候へとも、去春之義覚候て居申事ニ候得者、申出シ候由申候、去春之僉議之通尤之事ニ候、只今迄之通ニ被成御置可然由何茂申候

一 御鷹場御法度之処ニ猫飼申事、ざるふり御停止之事、ざるふり之儀ハ、右ニ全議濟、猫飼之儀ハ御免ハかわせ、御鷹野ニ御出被成候節ハ、つなき候様ニ可然由

一 江戸御留守御番ニ一組之内ハ大勢罷越、其組殊外無人ニ罷成事御座候、銘々あかさる様に可被遣儀かとの事

右僉議、書上之通尤ニ候、併江戸遠近之積り、亦ハ御用人之目論方々ニ付、外ニて存ル様ニハ少難成可有之との事

一 江戸御上下ニ舟渡など肝煎候所之者ニ被下物すくなく、何角と申候との事

以来ハまし被遣可然由

一 御使ニ江戸へ参候時、御使者長屋無之、難儀仕候、江戸へ付キ候て五日之内ハ御扶持方不被下候、参着之日ハ可被下かとの事

片山勘左衛門申候ハ、御使ニ罷越候者、岡山罷立候日ハ十五日分之御扶持方被下候、御使ハ八日九日十日ニも江戸へ参着致シ、緩々と参候儀ハ稀ニ御座候ニ付、依之江戸へ着候五日之内ハ御扶持方不相渡ス候物と存候由、自今以後ハ御使者長屋ヲ被仰付か扶持方江戸着之日ハ相渡り可然との事

一 諸事御擬作甲乙之事、御勘定場之帳ヲ改之御奉行被仰付、御改させ被成候様ニとの事

書上之通尤ニ候由

一 評定場ニて寄合之節、諸奉行共銘々手前之義御訴訟など申候節、御老中差計即座ニ埒立申儀も御座候、亦如何可有之と僉議有之時も御座候処ニ、訴訟人とも其座ニ罷有候ニ付、脇方存寄之儀有之候共、遠慮仕り不申義も可有之候、其上大勢其座ニ罷有事ニ候へハ、評定之儀とも何角と沙汰仕儀とも御座候、評定場御作事被仰付、今一問程も座敷出来、御用人共伊賀・猪右衛門ニ申儀老人宛罷出申、仕廻候ハ、勝手へ罷立、定而罷出候もの共存寄儀候ハ、伊賀・猪右衛門ニも申、兩人も被申聞、下評定も有之、其上ニ而訴訟人呼出し、僉議有之様も御座候ハ、可然との事

書上之通尤ニ候、御作事被仰付可然由、以上

八月廿七日

一 御穿鑿之事ニ御横目出合、穿鑿被仰付、割町之儀ハ御町奉行、郡之儀ハ御郡奉行と出合穿鑿仕候、其手下之事ニハ不覚ひかれ申物と相見へ候、自今以後ハ御穿鑿之事ニ其持之頭出合申儀ハ無用ニ被仰付可然候半哉との事

書上之通尤ニ候、事ニハより可申候へとも、大形ハ其手之奉行ヲ御引はなし御穿鑿被仰付可然との事

一 江戸にて御小性御馬廻り方々江御使ニ被遣候ニ、初而御供ニ參候御馬廻り御中小性とも初心成者江戸御着之日方々御使相勤候、此方へ社知れ不申候へ御使之先にて不調法成事共多ク可有之事ニ候、初心成者をハ御供御式台御番ニ御定、御大小性又ハ御中小性御馬廻り之内ニても、御使可相勤者ヲ御究メ、其内にて御供をも一兩人替り相勤、御式台御番ハ御免被成候ハ、可然儀と申由ニ御座候、例年江戸へ被召連候御供之人数ニても大形ハ可相調由

書上ケ之通尤ニ候、例年被召連ル御人数ニ而成申儀ニ候ハ、右之通ニ被仰付可然由

一 御馬廻り年罷寄候者共隠居にて無御座候得共、悴ヲ名代ニ被仰付被召遣候ても能可有御座候ハん哉、他国ニも左様之所御座候様ニ承候との事

書上ケ之通年寄御奉公難勤者ハ、望次第ニ悴ヲ名代ニ被召遣候儀可然由

一 江戸御供ニ罷越候御馬廻りとも、御留守御番ニ罷下り候節、いつも御先へ御上せ被成候、何月何日と兼而定り候て有之候ハ、銘々勝手ニ能候との事

一段尤之由

一 岡山中ニ水通りを被仰付候様ニと数年何茂願ひ申との事

右僉議、水樋河上る取候て掛り可申候哉、御普請奉行など目論可申上由

一 御家中祝言道具之儀 公儀江上ケ候分にてハ成不申候故、何と仕候ても御定之様ニハ内証ハ不仕、作り物之様ニ成申由ニ候、御定餘輕過申故かと申候、御定ヲ少御直シ被成、民部御横目相談之上、相応ニ相究候様ニ可然との事

小堀彦左衛門申候ハ、御定ハ只今迄之通にて被為置、遣シ不申候而不叶物候ハ、銀にて娘之方へ遣シ候様ニ可然かと申候、猪右衛門被申候ハ、左様ニ成行候ハ、銀ヲ付ケ遣し申様ニ成申候て可有之候へハ、其段も如何と被申候、^念全議落着無之

一 在々竹木伐候御横目など御中小性とも被遣候、以來ハ御徒横目被遣、惣而御横目と有之所へハ御横目可然儀と奉存候、御小性など之御横目ハ其頭横目にて無御座候、頭之僉議無之候、御徒横目ハ其頭横目にて御座候故、頭之手前にて僉議仕、様子ヲも承届ケ申候て可有御座候得ハ、奉行之存寄も違可申候哉、又御奉行之善悪も上江相達可申候哉との事

書上ケ之通尤之由

一 数人能御奉公仕御用才をも能相勤申候御徒之者、村代官之明キ御座候節、老人宛成共御入被成候様ニ御座候ハ、可然儀と奉存候、御徒にて年々御用相勤候もの村代官など之御用勤かね申間敷様ニ存候、仮同位之御用人ニ候ハ、新座者可被召抱ハきうこの者被仰付候ハ、其身ハ忝存、旁以可然義と之事

右僉議、書上ケ之通尤ニ候、併村代官之あき御歩行方計入候ニ突り申儀も如何ニ候、御徒方も入、新座ニも被召抱候様ニ

可然由

一江戸にて御客御座候節、又ハ不断ニても餘切詰たる事ニて御出掛りなと御座候時、不出御膳之事成かね申儀可有之かと脇より悔申義御裏判御繕奉行共も存候て居申候へとも、ゆるかせニ有之候ハ、むさと費も可有之事ニ候故、吟味無之ヲも不叶義ニ候、併細か過申様ニ御座候との事

書上ケ之通尤ニ候、不断ハ拾人前之よけい程可然候、御客有之時ハ五人前ほと餘慶ニても能可有之由ニ候

一御台所賄仕候者手前ニ出来と申儀御座候、御台所ニて食被下候者大勢之儀ニ候、毎日朝夕其人数ヲ以テ御台所横目判形仕候、此判形を以テ御台所賄御勘定仕事ニ候、出来一年ニ貳拾俵三拾俵宛近年差上ケ申候、未々迷惑仕候様ニいたし、加様之義ニても無之、定り候ほとハ入不申候故と聞へ申候、此出来御台所差上ケ不申候とても定り候扶持方之内方出ル事ニ候へハ、無利儀候て私歎在之ものハ差上ケ不申候事も可有之候、其ニ引合候得ハ敢早出来ヲ上ケ不申候へハ、不成様に成り来り候、其上未出来多ク有之候も、何とも知しかたき事ニ候へハ、ほめ可申様も無之儀ニ候、出来多ク上ケ候ヲ能と存候ハ、後ニハ未々之痛ニ成候様ニも可有之候、第一定りたる扶持方之内ニて出来上り候事如何ニ候、是ハ公儀江被召上候事ハ無用ニ被成、何とぞ定りたる外之事ニ可成事も候ハ、打込申様ニ仕可然儀ニ御座候ハん哉との事

右色々僉議有之候へとも、定りたる外之事ニうちこみ候事、或ハ常之定りより料理など念ヲ入候とても出来如斯と有之様ニ成り候、又出申ニ究り候米を無理ニ不出様ニ可仕様も無之事、先々只今迄之通ニて未々ノ者とも迷惑不仕様ニ御台所賄心ヲ付可然由

一何ヲ取極又たる事も無之候へ共、御台所方之者共不法ニ風俗悪敷御座候、御膳奉行とも頭之様ニハ御座候へ共、睨と頭と被仰付たる儀無之と申者も御座候、頭御座候て随分と存候ても存様ニ無之候ニ、御台所方ハ事多キ所ニても御座候ニ、しかと頭無御座、身ニ引請候者無之候てハ、猥成筈ニて候、御膳奉行共ニても急度頭と被仰付可然儀と奉存候との事

書上ケ之通尤ニ候、急度頭ヲ被仰付可然由

一万売物近年高直ニ御座候、他国も左様ニ御座候と相聞候へ共、当国ハ取分高直ニ御座候と申候、近年奉公人共町へ多ク引込、人大勢ニ成申候故、引込候者之口すき無之候得ハ不成事、仮古へ十人売買仕候もの只今貳拾人ニ而売買、二所三所ニて利ヲ取候故、高直ニ罷成候積り之由申候、其故奉公人も少ク給米も高直ニ御座候由申候、岡山町へ奉公人之引込洪水以前方ハ三千人も増可申かと申候、其者一人一日ニ薪油三分平シニ仕候ても一年ニ三百貫目之積りニて候、左候へハ其し程ハ薪油入増、高直ニ成ル積りニて候、其上当町之様子、身ヲ持候者ハ日々ニ能成、侘たる者ハ日々ニ迷惑仕ル由ニ候、それハ小身成ル売買仕候者も利を多ク不取候へハ不成由ニ御座候、本銀之有之者ハ売買方家ヲ買候かましニて候とて方々ニ而高ク家ヲ買、作事ヲ仕、借屋賃を古ノ二五割も一倍も上ケ、近年之内ニハ本銀ヲ取返し申由ニ候、左様ニ申ニ偽りも少ハ可有之候へとも、亦少証拠も御座候ハ、近年之様に町人とも念ヲ入、方々ニ作事仕儀ハ無御座候、尤町人共すいび仕候様ニ被仰付義ハ有之間敷事ニ候得共、相応ニ利ヲ取り家職に情ヲ出シ能働、其之景ニて口すきヲ仕、乍居高利を取候事仕間敷候、并作事又ハ衣類なども軽ク可仕候、分ニ過候者有之か高利を取候者有之

候ハ、急度曲事ニ可被仰付と御町奉行申付候ハ、能有御坐候、町人共手前能成候者、待共百姓共手前取不申候へハ、能不成事ニ候、それほと侍とも勝手迷惑仕筈ニ御座候との事、色々僉議有之、岡田喜左衛門申候ハ、町借屋賃之儀さほとに過分ニ上り申にてハ無御座候、所ニ取前より安ク成候所も御座候、尤上り申所も多ク御座候、過分ニ上り申ハ何とそ子細も御座候て上り申候、むさと五割一倍も上り申にても無御座候由申候、御大横目共申候ハ、借屋賃近年過分ニ上り申段ハ如何ニも必定之由承候由申候、喜左衛門申候ハ、此方ニても弥様子立聞せ可申候、御徒横目ヲも出シ聞せ申様ニと申候、伊賀・猪右衛門も御横目出シ聞せ申様ニと被申渡候、売物高直喜左衛門心付常々可申付由

一從在る岡山町江引込候者之儀、右僉議濟

一町之小商仕候者出買と申^{前カ}申儀有之、在るノ口々亦ハ舟之下り申処へ夜中一里式里程宛罷出、百姓売ニ出候者ヲ買申候、百姓岡山へ直ニ持出候をハ出買之者中ニて買申候故、直段高ク候との事
岡田喜左衛門申候ハ、出買之義此以前も留候て見申候、百姓共岡山へ持罷出、侍とも二売申にてハ無御座候、直ニ問屋方へ持參候と相見へ申候故、出買之者買申たるか結句ましにて候様ニ承候由、先々唯今迄之通ニ可然由、以上

八月廿八日之評定

一町人共ニ町口見込候ためとて備中口川下町口ニて先年屋敷被遣、殊外裏へ広ク大分ニ被下候、御持筒之居申屋敷被召上、町人ニ被下候も御座候、此替屋敷田地ヲ被召上被遣候ニ付、百姓も迷惑仕御鉄炮之者ニ田ヲ被下候、水つき迷惑仕候との事

不及僉議

一職人屋鋪ヲ何方ニても被遣可然義と申候、万之手間下直ニ成可申候哉、殊外家賃高ク御座候ニ付、手間代ヲ家賃ニ掛ケ可申候、只今手前能町人とも自分居申処ヲ能仕、取前借屋三ツ御座候処ヲ三ツニ仕り、其三ツ之家賃にて取前三ツ之代ヲ取申ニ罷成候ニ付、借屋ハすくなく家賃ハ右之一倍も高直ニ罷成、未々之町人殊外迷惑仕候由ニ候、唯今屋敷被遣候ハ、家賃之無構候間、家賃之積りほとハ細工手間さげ申様ニ被仰付可然儀と申候、何ぞ之次而ニ惣而之売物直段を上げ候てさげ申義無之候故、次第ニ高直ニ御座候、ケ様儀者奉行吟味仕、時節相応ニ万直段ヲも究メ候様ニ可然義との事

先々唯今迄之通ニて御置被成可然由、家賃高直之僉議右ニ濟

一町ニ有之奉公人引込、洪水方以後ニ引込候者共、以御横目ヲ改、人数御書付させ被成、在所ニ田地有之者ハ在所ノ江引返し、田地無之者ハ新田ニても被下、洪水已前之町人計岡山ニ而商仕可申旨被為仰付可然義と奉存候、併只今加様ニ被仰付候事も如何ニ存ル所も御座候、自今以後之奉公人引込重々念を入、御町奉行御郡奉行出合、奉公も不成百姓も難成者計町人ニ成候様ニ被仰付候ても能有御座候哉

町江引込候事右ニ僉議濟、此以後引込候義書上之通尤ニ候由

一々々奉公人ニ妻子前々ハ在所ノニ置申候故、奉公仕候へハ親兄弟之たりにも成申候、只今ハ岡山町屋ヲ借り妻子ヲ置候故、在所江之少之見次も不仕、又主人へ手前も不奉公ニ罷成、其上不作法成儀も有之由承候、奉公人之妻女ハ其者之在所ノニ置申様ニ被仰付可然との事

鈴田武兵衛・津田重二郎申候ハ、書上之通尤ニ候、在所ノ二置候ハ、可然儀と申候、森平右衛門申候ハ、奉公人之妻子在所に置候事ハ書上ケ之通能事多ク可有之候へとも、在所ハ一里式里、或ハ五里十里も可有之候、小身なる者之下人など切々在所江參候事も不成事ニ候へハ、妻子ニ老年ニ二三度程ならてハ対面も難成程ニ可有御座候、また人により在所江預ケ可申者無之も可有御座候、縦近キ親類ニて御座候とても、百姓之家間所も無之ニせばき処のミニて可有御座候得ハ、妻子預ケにくき儀も可有御座候、下々奉公人之妻子町ニ置不申様ニ被仰出儀も如何と奉存候由申候、武兵衛・重二郎申候ハ、前々ハ皆々其者之在所ニ置申候、然ル上ハ只今とても同事ニ候、在所ニ置申様ニ被仰付能可有御座かと申候

右僉議有之、先々唯今迄之通ニ被成置、去春被仰渡候通親兄弟二も不知せ、睨としたる謀も無之夫婦之申合仕間敷由弥堅被仰付可然由

一 町屋ニかこい女弥改、置不申候様ニ可被仰付儀ニ御座候との事

岡田喜左衛門申候ハ、只今迄も随分堅申付候由

一 当町万之問屋ノ御歩行横目御出シ、万売物之元之直段毎朝御聞せ被成候者、過分ニ高利取申儀御坐有間敷との事

岡田喜左衛門申候ハ、此段一段尤ニ存候由、何茂右同事ニ申候

一 老中知行所之者、御家中侍共方へ奉公ニ罷出、有付候て居申もの、亦ハ久々召仕候者ニても出替ノ時分ニ引返し自分ニ置餘候へハ、銘々家来之者迄抱候様ニ被申付、或ハ鍵持馬取ニ成候者も草履取人足ニ召仕候へハ、給米各別違、迷惑仕由ニ候、扱自分家来迄置あまり候節、脇江之奉公立聞申仕合故、弥奉公人迷惑仕候、主人

も取立召仕候者又ハ江戸江召連候者など引返され事かき申儀多御座候由ニ候、左様ニ候とて小身なる者知行所之もの引返し候事も不成義ニ候故、迷惑仕候との事

伊賀・猪右衛門被申候ハ、兩人も内々左様ニ承候、併兩人ハ居掛申などハ終引返し申事ハ無之候、以来ハ居懸り之者ハ老中知行所之者ニ候とて引返し、手前ニ抱候様ニハ仕間敷候由

一 御国下々奉公人、殊外大ぢやくニ御座候て、士共江不礼なる躰ニ御座候、小身成士共召仕候下々ハ、主人之下知ニも随不申候様ニ承申候、少々之事も 御耳江立候ハねハ成不申候故、成敗など仕候事不罷成と存、心根より慮外をも仕候と見へ申候、主人も大形之儀ハしかり候て、悪敷返答も仕候へハ、成敗も仕候ハてハ不成と存候故、堪忍を仕候て居申候故、弥下々ハおこり申様ニ御座候、小身者とも去年召仕候下々、当年ハ路次ニて逢候ても見知り不申候躰ニ慮外成ふりヲ仕被過候、加様之風俗ニて御座候、士中腹立仕候との事

先主ニ不礼不届之儀ニ候、左様之者有之候ハ、曲事ニ可被仰付候、惣而下々おこり候由被聞召候、急度可申付由可被仰付候哉と何茂申候

一 御家中下々奉公人給米之御定、先年被仰出候ハ高直ニ御座候、今程御定方ハ下直ニて召抱候、同者奉公人御奉行被仰付可然由取さた仕候と承候、米相場奉公人之多少ニより奉行僉議仕り、給米相定申候様ニ可被仰付候哉との事

奉公人之給定之儀、此已前も奉行被仰付候へとも、上中下之吟味も何とも究かたく候由ニ候、其上数多キ事ニ候得者、埒立かね可申候、先々只今之通ニて可然由

一江戸御屋鋪にて走人御門札なしニ罷出候節、御門番越度にて御坐候得とも、大勢ノ出入ニ御座候へハ、紛レ出間敷儀ニ而も無之、左様ニ候とて御差ゆるし被成候へハ、御門之しまり無之候、心ニあやまり無之ヲ御成敗ニ被仰付、御扶持放され候事も如何ニ候、以来ハ御門札なしニ出候者於有之ハ、其節当番之者共ハ科錢ヲ人別ニ出し候様ニ被仰付、若又走り人とらへ候か無左とも知し申様子可有之候間、其節ハ急度曲事可被仰付旨被仰渡候ハ、見ゆるし通し申儀も御坐有間敷候、走人之度ニ御門番之儀被仰付被成にくき儀様子にて御座候との事

色ニ僉議有之、向御屋敷之者御本屋敷へ主人之供などニ參、それ方走り可申と存候へハ、御本屋敷之御門ハ向御屋鋪者ハ札なしにも罷出候故、走り申事自由ニ成申候、御本屋敷之もの向御屋しきへ參候ても右同事ニ候、御本屋敷と向御屋敷と札を別ニ被仰付、走り人とらへ候時御門番之義品ニ被御成敗或ハ御扶持はなされ、又ハ過錢ニも被仰付候様ニ可然由一御手廻り御中間増シ扶持少きとの事

御勘定場之帳御改之時僉議可有之由
一江戸ニ定小作事奉行御置被成可然義ニ候、破損之儀ヲも一年切之様ニ存、当分御金銀之不入様ニと存候てハ破損も多ク御そんにて可有之候、定小作事奉行とハ仕様違可申候、小作事ハ大分ニ御用にて御座候、年々新敷奉行被成候儀如何と奉存候との事

定小作事御奉行江戸ニハ被召置候て可然儀と前々申儀ニ候、下奉行とも定江戸ニ被仰付能可有御座かと申者多ク御座候一御番頭ニ御預ケ之御足輕引廻シ之者共之義、足輕之事万番頭さ

二かまわせ候番頭も候へ共、大形ハ番頭計之さいはんにて候、召抱候時なども吟味をも仕、常々見知り候様ニも御座候ハ、可然義と存候、只今之通にてハ引廻シ之下知ニ付かね可申との事

何茂番頭中間申合引廻しもさいはん仕らせ候様ニ可然由
一着類御法度之儀人々ニ相当ル儀にて候由にて、初而出座之者有之度ニ僉議有之候、一寸ニ木綿ニ被仰付可然と申者も有之、又只今之通ニ被仰付御尤と申者も有之、不一定、然とも唯今迄之通可然と申者多ク候、以上

大寄合今日終ル
午ノ八月廿八日

右寄合之儀於 御城猶又御僉議之上、御書付ヲ以テ被 仰 出写

一國中物成之儀、郡中諸事之用米ヲ引残而三ツ五分之年ハ不成事ニ候、其上有之年ハ御蔵入給所平シ而残分一分通ハ用銀用米ニのけ可申候、豊年ニ而郡用ヲ引、三ツ九分之上残り候ハ、八分上ハ有次第用銀ニ可仕候、今之用銀用米之不足にてハ自然之時御奉公難成かるへき段、第一無心掛と存候事

一士共身軀不成者内証ニ而可仕様なく訴訟申候ハ、番頭物頭ハ組足輕知行家屋敷共ニ指上ケ、小身成者ハ知行家屋敷指上、在郷可仕候、在宅之模様ニ有二人何人ましと積りかんなんにて暮シ候擬作にて扶持方計遣、借銀相濟候とも、一、三年物成つミ置、家普請用銀迄手当テ有之候以後可罷出候、組足輕之義ハいつニても明キ出来次第可申付事

一士共國ニ而衣類木綿紬田舎絹可着之、羽織袴も可為同前、但お、

嶋ハ可為無用事

一士共江戸にて之衣類ハ弥可為如先年事

一女出替三月廿日、九月廿日ニ可申付事

一足輕之小頭拾人ニ老人宛可申付事

一士共年寄或ハ病者なる者ハ望次第品ニより忤名代ニ可申付事

一家中若党下々前主之義ハ不申及、侍共江対し不礼不仕様ニ主々堅可申付之事

一郡々普請所之義、郡奉行見及候上三て所より三人之普請奉行共も見及、相談可申付候、家中鉄炮又ハ役人無抛用有之時ハ、其奉行江相断可任差凶候、惣而鉄炮之者役人共於有之ハ、猥に無之様ニ頭々堅可申付事

一正月砌岡山在々子共ほうひき・あないち才之遊ひ悪習之本ニて候間、自今以後可為停止事

一当町中間屋々江横目ヲ出シ、本之直段聞届ケさせ可申候、付北国舟屋祢木鹿料積来候時、是又横目を出し裁判可申付事

一在々村ニ方百姓すくなく田畠分限ニ過候所江ハ、岡山へ出候さるふり呼返し入可申候、但入候へ而も村之為ニも不成者ハ無益事ニ候間、町奉行郡奉行相談之上可相計之、自今以後奉公人之引込ハ重々念入、町奉行郡奉行出合吟味之上三て、百姓も不成奉公も難成者ハ町江引込候様ニ可申付事

一江戸江士共召連候下々、其時所之便ニ不成者ニて候共、村所之者ニて慥成者ニ而候ハ、請ニ立候様ニ奉行共可申付事

一海辺之いけす船可為無用事

一鷹場ニねこ飼候義不苦候事

一在々十村肝煎遣米式石宛増可遣候事

一在々江入候諸商人、只今迄之通堅留候而ハ迷惑仕族も可有之候間、入候ハて不叶商人ハ奉行心得次第入可申候事

一在々救米之義銀ニ而成とも米ニて成共、又ハ銀米両様ニ成共、郡奉行銘々好次第ニ可申付事

一在々とくいかしの能仕ル者穿鑿仕可申上候事

一川口舟留番所ニ加子老人宛下番ニ申付置、只今迄罷出居候賃取番所ニ置申ましき事

一郡々日用米百石宛可遣置候、麦時無之所ハ麦田ニ仕、悪田ニ而立毛不出来之所へハ入土仕、田地之つくろいニ可仕事

一岡山道水拔三人之普請奉行共常々見及可申付候事、附橋之義ハ普請奉行見及、樋奉行と相談可仕候事

一葬之事、自今以後土葬ニ可仕候、付百姓町人死候時棺之義自分ニ調候事難成者ハ、村中或ハ一町内として可相助事

一百姓町人共善事凶事五人組として相助、善事之ほうひ悪事之罪料共ニ五人組江懸可申候事

一郡々江講釈仕候者老人宛下ニ而聞立入置可申候事

一村代官共村々江打はまり弥念入候様ニ常々可申付候事

一老中知行所之者家中江奉公仕居申候ヲ呼返し候義、先方断申候ハ、聞届、其分ニ可仕候事

一家中犬はやり候事、老中申合長シ不申候様ニ可仕候、岩乘などの為ニ小身者飼候ハ、其頭江相断、つなき候て飼可申之事

一下々女持候事当春申付候ことく、互ニ親兄弟も存知、慥成媒ヲ以可相調候、自分之申合可為停止事

一自然之時から出人毎年改之奉行可申付候事

一番頭預り之鉄炮之者召抱候砌、引廻シ之者共ニ相談可仕候事

寛文六年午ノ九月九日